

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02192

研究課題名(和文)「ポスト・ヒューマン」時代のメランコリー

研究課題名(英文)Melancholy in "Post-human" era

研究代表者

丸川 誠司 (Marukawa, Seiji)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：70339612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：当計画は、人間の主観性及び人文主義的理想等が疑問視されるいわば「ポスト・ヒューマン」の現代において、芸術、文学、思想の領域で扱われてきたメランコリーの持ちうる意味を探ろうとした。パノフスキー等の「土星とメランコリー」、J. クレール等の「メランコリー：西洋の天才と狂気」の延長線上で、主に絵画的表象の研究がなされた。メランコリーは自己の反省・反射と不可分であり(屈んだ姿勢がその象徴)、それは常に自分と自分を取り巻く環境を巡る懸念を伴う。だがかつてのメランコリー(創造的でもありえる悲しい情熱)がいわゆる鬱に取って代わられたかのような現代、我々はこの(自己)省察の意義について自問する必要がある。

研究成果の概要(英文)：This project tried to rethink, through the deepened analysis of some pictorial representations, the meaning of melancholy in the so-called "Post-human" period where Human Subjectivity and Humanist ideals are questioned. The study was carried out in the vein of "Saturn and Melancholy" and "Melancolie: genie et folie en Occident". The melancholy is inseparable from the self-reflection (represented by the bent figure) which goes along with some apprehension of oneself and of his surroundings, expressed in works of art of all time. But we can ask the meaning of this self-reflection in our century where the ancient melancholy (sad passion which can be creative) seems replaced by the depression. If the angel of Durer could not fly, the contemporary man falls, crashes, goes rusty (Kiefer). There might be no catharsis in some contemporary works of art realizing "the Ideal of Black"(Adorno). It seems these works somehow try to restore "the meaning of the World" which seems almost absent now.

研究分野：ヨーロッパ文学、思想、美術

キーワード：メランコリー ヒューマン 理想 ポストモダン

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの芸術・文学においては「メランコリー」の表象を巡る研究が予てからすすめられていたが、とりわけ過去20年は、現代社会の病ともいえるいわゆる鬱との関わりもあって以前よりも注目を浴びることになった。草分け的な研究書は古くは「土星とメランコリー」(パノフスキー他)であるが、2005年の「メランコリー：西洋における天才と狂気」というパリでの展覧会とその図録に専門家や文学者が寄稿し、一躍欧米での関心が高まっていた。しかし日本では特にそうではなく、我々はなぜ「メランコリー」の表現が絵画や文学において重要な位置を占めてきたかを再検討する必要性を感じていた。

2. 研究の目的

古代ギリシャ以降ヨーロッパ近代にいたるまで、いわゆるメランコリーは、ただ人が陥る憂鬱で無気力な状態だけでなく、真に創造的な人間に特有のものと考えられていた。メランコリーは現代のいわゆる「鬱」とは異なり、鬱屈した心を次の創造的な活動に向けうる潜在的能力を持っていると考えられていた。だがそれは一歩間違えば、次の発展段階への契機を失った、「人間の生命の根絶」(P. フェディダ)となってしまう。古代エジプト以降のメランコリーの表象の歴史は、人間の精神が「失墜」と「救済」の可能性の間で揺れつづけてきたことを示している(『土星とメランコリー』)。この線引きはどこですればよいのか。例えば後期のフロイトの発想では、メランコリーはタナトスが位置づけられる唯一の場でもあった。これはどうして新たな創造に向かうエロスへと転換しうるのか。このような疑問を、絵画史における表象の系譜と、文学者や思想家の著作を通じて新たに考え直すこと、そしてそれが、現代的な文脈でどういう意味を持ち得るかを考察することが最初の動機だった。

またこの研究には、21世紀における思想的な背景も射程に入れておく必要があった。ちょうどハーバーマスは2001年の「人間の本性の将来」の冒頭で、アドルノの「ミニマ・モラリア」を引用し、哲学が、現代の人間にいわば人生の最終目的を与えるべきメタフィジカルな次元を見失ってからメランコリックな「悲しい知」となったというくだりを喚起している。ハーバーマスの言う「ポスト・メタフィジカル」な時代の思考は、倫理的な次元を含め様々な価値基準の喪失に特徴づけられる二十一世紀の深いメランコリーに直面しているといつてよい。「ポスト・ヒューマン」、「ポスト・ヒストリー」等、かつての「ポストモダン」(それ自体近代の理想の終焉を意味する喪の発想である)に引き続き現れることになった現代文明の形容辞は、いわゆる「ネ

オ・リベラル」や「ネオ・コンサーバティブ」等の傾向の混在する現代社会の状況に対応している。予てより、新と旧の世界観及び価値観が対立し入り乱れる時期は、過ぎ去った時に対するメランコリーと、新しい時代の到来に対する不安に満ち溢れ、おそらくはそれ故の激しい鬱屈状態と、その反発でもありえる豊かな創造の力を生み出してきたと言える。だが、この「ネオ」と「ポスト」ばかりか全ての対立要素の共存する21世紀初頭において、負の要素が転換し得る機会は遠のいているように思われる。何らかの理想に向けて自己を磨く文化(文明)の中でこそかつての「メランコリー」の意味があった。この一方で、スピードと成果に全てを還元し、価値観を一元化しようとする現代においてそれは最早「メランコリー」ですらない。テレンバッハ以降の精神病理学的な分析によれば、人間個人の主観性に自由な居場所を認めない現代において、「鬱」はそのシステムに適用できないとされた人々が陥りやすく、いわばネオ・プラグマティックな社会の陰画かつ優れて現代的な病である。それはただの病であり、最早そこに負の要素以外のものは見いだしにくくなっている。この「鬱」にかつての「メランコリー」が秘めていたような神話的な力は最早期待し得ないのか、いわゆる「ミュトス(神話=物語)」が不在の現代において、過去の「メランコリー」の表象とその受容の歴史、それらを巡る思想的な考察を辿り直して再考し、あらたな側面を見出すことが最終的な目的であった。

3. 研究の方法

文献面では、時代別のヨーロッパの芸術・文学及び思想・精神分析の両方の分野におけるメランコリーに関わる書籍、論文を収集、熟読し、問題系を整理した上で、重要な点を掘り下げて研究する、という方法を取った。とりわけ重要な芸術作品については、実地調査を行った。対象作品を所蔵する美術館と付属する図書館における資料収集、データベース検索、関連する作品群の調査等を進めた。版画等は美術館の学芸員と予め接触し、実物を準備してもらっている。

4. 研究成果

ルネサンス期、4気質と占星術に結びつけられて構想されたデューラーの「メランコリアI」から500年。近代が脱神話・脱呪術の過程であるならば、その不完全さを表すかのような症候として、近・現代の芸術作品に頻出するメランコリーを、時代別に考察した。特に掘り下げた主題が、複数の論文の成果として表れている。題材が豊富であったため、結果的に、バロック期の主題が集中的に扱われることになったが(ル

ネサンス期をめぐるものはこの研究期間以前になされている。これはむしろ「フマニタス(人文主義的教養)」から「ヒューマン」の時期を対象としたものであり、いわゆる「ポスト・ヒューマン」の内容は最後の20世紀後半の芸術を対象とした論文で扱われることになった(一部は来年度の紀要で出版予定)。以下論文の要旨を略述する。

(1)「鏡とメランコリー：カラヴァッジオとプッサン」メランコリーとナルシシズム(鏡と反映の主題)エロスとの関連等を考察。

概してバロック期の間像には、ルネサンス期より高い人類を目指す偉大なプログラムへの幻滅と疑念が付きまとっているとされる。「魂の救済」に力点を置き、現世の空しさや罪の意識を強調するカトリックの教義が広まる中で「メランコリー」の表現は当然ながら一役買うことになり、この時期一般的な図像表現を見出すことになる。文学と諸芸術が体现する時代精神は、闇の世界への逆行とは言えないまでも、中世的な幽霊の再来にも直面する(ベンヤミン)。あるいは無限の宇宙と虚無(ないしむなしい人間の生)が対立する。「悔悛」と「はかなさ」を激しい対立で表現するこの文脈において、カラヴァッジオの「マグダラのマリア」「聖ヒエロニムス」「ナルキッソス」「メドゥーサの首」などの分析、引き続き彼に密かに影響を受けながらもそれを拒んだプッサンの「リナルドとアルミダ」「バッカスの誕生/幼年期」(とナルキッソス)及び自画像ならびに「四季」との関連などを分析した。

(2)「思考の肖像」

17世紀バロック期のメランコリー表象の続きとして、デモクリトスとヘラクレイトスのペア等を始め、世界を考察する学者とメランコリーの主題を検討。ベラスケスとレンブラントを中心に、思考とメランコリーの親和関係の系譜を扱った。ニーチェがいわゆる犬儒主義の哲学者について指摘した、思考する者が世界と保たざるを得ない距離、その隠されたメランコリーと表現について考察した内容。その意味で、バロック期の哲学者・思索者の肖像は注目に値する。それは暗闇での隠遁、廃墟での沈思を好んで表現するばかりでなく、時に、社会から隔離された貧者・乞食、あるいは高らかに笑う道化の姿をも借りるからである。しかもこれらはイタリア、スペイン、フランドルの全地域において異なる脚色を経ながら共有されたイメージの類型である。俗世間との乖離は、それに対する絶望をも意味し得た。とりわけ「(悲惨な世界を泣く)ヘラクレイトスと(もはや笑うしかない)デモクリトス」のペアの絵画をめぐる、ルーベンスからベラスケス、レンブラント、テル・ブリュッヘンなどに至る作品が検討された。特にベラスケスについては、「デモクリトス」「メニポス」「イソップ」の他、「(戦の神)マルス」および最晩年の「メルクリウスとアルゴス」を通じ、殺す者と殺される者のメラ

ンコリーを扱った。

(3)「ボイスとライナーの傷」(ライナーの部分は未発表)

ヒトラー・ユーゲント参加の過去を持つJ.ボイスの「傷」を巡る作品、あるいは広島原爆の写真の傷を覆い隠すA.ライナーの作品など、第二次世界大戦後の芸術家のメランコリーを考察。

表象の不可能性、作品創造の不可能性の限界に取り組む芸術家のアプローチを通じ、人文主義の理想がいわば廃れた時代、ポスト・ヒューマン、あるいはポスト・ヒストリー等、20世紀までの近代の思想的枠組みの終わりがいかに「喪」の思想として表現され得るかを考えた。仮に喪が具体的な対象の喪失、メランコリーが自己愛の喪失に関わるなら(フロイト)、ボイスの場合、喪の対象は、当然ながら戦争とホロコーストで見失った自分の国、ドイツと過去の自分でもあった。自らの芸術を社会変革にまでつなげようとしたボイスのナイーブな試み。ある意味では「芸術の政治化」である。は勿論頓挫する。彼の晩年の作品、「20世紀の終わり」(1つ目のトルソの残骸の集積)、「王宮」(メドゥーサの首の主題が復活する自=伝的作品)は、自らの「傷を見せる」メランコリックな試みでもあった。

(4)「大きくなる夜」:現代詩の領域における「夜とメランコリー」の系列を研究。最晩年のパウル・ツェランが訳したジャック・デュパンの詩、二人の詩人(及びデュパンに協力した芸術家のアントニ・タピエス)のメランコリーと「夜」の詩人の系譜をめぐる論文をフランス語で執筆し、現在海外の学術雑誌で査読中である。

「人間ほど恐ろしいものはない」と指摘するソフォクレス、「アンチゴネー」のヘルダーリン訳で象徴的に用いられる「夜 Nacht」と「否 nicht」の韻だが、パウル・ツェランの最後の翻訳であたかもそれが深い意味を持つことになる。精神を患い、自死に至る直前のツェランがなぜデュパンの「大きくなる夜」を選んだか、草稿の研究を踏まえながら考察している。

これらの論文すべては、「研究の目的」で上述した現代における「メランコリー」の意義考察の必要性に、複数の角度から応じた内容である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

丸川誠司、「鏡とメランコリー：カラヴァッジオ/プッサン。〈ポスト・ヒューマン〉のメランコリー(2)」、『学術研究』, 査読無, 第64号, 2018年, pp.311-337.

丸川誠司、「思考の肖像。〈ポスト・ヒューマン〉のメランコリー(3)」,

『学術研究』, 査読無, 第 65 号, 2017 年, pp. 273-295.

丸川誠司, 「隠す、覆う ボイスとライナーの傷(正). <ポスト・ヒューマン>のメランコリー(4)」, 『学術研究』, 査読無, 第 66 号, pp. 291-309.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸川誠司 (MARUKAWA Seiji)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号: 70339612

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし

研究者番号:

(4) 研究協力者

なし

研究成果の概要